

## 468 血中ペプシノーゲンI Radioimmunoassay Kit の

基礎的検討

高橋路子、斎藤智恵子、風早康弘、井坂健一、  
渡瀬 巖（ミドリ十字 R I 商事部）

ペプシノーゲンI (PG-I)は胃体部および胃底部に分布し、主細胞や副細胞から分泌され、胃酸の作用により活性化されペプシンに変換される。

PG-Iの測定は従来蛋白分解活性測定により行われていたが、SamloffらによりRIAが開発され、血中PG-Iレベルが胃酸分泌細胞粘膜の胃酸分泌能を反映することから臨床的に血中PG-I値と消化性潰瘍との関連が注目されている。

本キットの操作法は10倍希釈の血清100 $\mu$ lを用いて室温で一晩インキュベーションし、第2抗体にImmunoprecipitating Reagentを使用し、BF分離を短時間でを行う方法である。

本操作において、最小検出感度は1ng/mlで、再現性はアッセイ内のCV4.8~10.5%、アッセイ間のCV7.4~11.7%であり、回収率は93.8~113.6%を示し、血清および標準PG-I添加正常人血清をbufferで希釈して得られる希釈曲線は原点を通る直線を示した。

キットの安定性は、2~8 $^{\circ}$ C 2カ月であり、今後、その臨床応用、特に十二指腸潰瘍や萎縮性胃炎等の診断に血中ガストリン値と対比し、その測定意義が期待される。

469 前立腺抗原(PA)の精製とRIAの開発  
小川祐司、森川惇二、大沢劉三郎(栄研ICL)  
三木 誠、町田豊平(慈恵医大・泌尿器科)

1979年Churaにより前立腺のPBS抽出物より分離・精製された前立腺抗原(Prostate specific antigen:PA)は、分子量3万4千の糖蛋白である。この蛋白は、前立腺以外の組織中には存在しないことが免疫学的に認められ、前立腺癌との関係が注目されている。

我々は、前立腺肥大症組織より、Churaの方法に準じてPAを精製した。得られた精製PAのSDS Disc電気泳動法による分子量測定の結果、約3万4千の分子量が得られた。次に精製PAと抗PA家兔血清を用いて血中PAのRIAを確立した。測定方法は、血清100 $\mu$ lを用いた二抗体法である。

前立腺未治療例21例についての測定結果は、95%が正常人より高い値を示し、前立腺酸性フォスファターゼ(PAP)との相関は、相関係数が0.63であるが、PAP陰性例でPA陽性例が3例(14%)認められ、PAが前立腺癌の腫瘍マーカーとしての有用性が示唆された。

## 特別発表

## 470 核医学検査コードの試行と検査項目調査

—日本アイソトープ協会用語分類委員会報告—

木下文雄(委員長)、◎佐々木康人(副委員長)  
(日本アイソトープ協会用語分類委員会)

日本アイソトープ協会医薬学部会用語分類委員会では厚生省の委嘱を受け、世界保健機構発行のInternational Classification of Procedures in Medicine(ICPM)の放射線部門の翻訳事業を完成した。

ICPMの核医学検査コードの委員会内試行を行った後、本年6月に本コードの全国規模の試行を行った。すなわち6月1ヶ月分の検査項目をICPMコードにしたがって分類し、記載する調査票を全国核医学検査施設に配布した。この調査により、わが国における

In Vivo, In Vitro核医学検査の実施状況、ラジオアイソトープの実際の使用量について推定する情報がえられると期待される。

本調査の集計、解析結果のうち、学会開催時迄に終了した分について報告する。